

私の家のそばを走る信義路は、台北市を東西に貫く幹線道路で、ここ1年近く地下鉄（MRT）の工事が進められている。工事個所に沿って車を走らせるとやがて新莊市にたどりつく。終点付近は、操車場の建設用地になっていて、広大な敷地に無数の重機が蟻のように働いている。

そのすぐそばに、ひとかたまりの緑が見える。そこが「楽生院」。台湾で



唯一つの公立のハンセン病療養施設である。この施設の特性を物語るがごとく、その部分だけが都市化から取り残されたオアシスのように青々と草木が茂っている。

本館の建物は日本統治時代の昭和5年に落成した。その背後に「王」の字形に病棟が続き、長い廊下はしんと人影もない。見詰められることもなく、敷地内を進むと、レンガ造りの一戸建

てが山腹に点々と立ち並んでいる。いまも三百数十人の人たちが入所しているとは思えないほど、ひっそりと静まり返り、外の喧騒とは別世界である。

昭和5年というと、もう75年前のことになる。野放図に枝を伸ばして屹立する巨大なガジュマルの木が停止した時間の長さを物語っている。その木の成長を見続けてきたという黄燦桐さんは、昭和18年に9歳で入所したとい

もない。今では出入りは自由だというのに、帰りたいとも思わないという。

黄さんは、足と目が不自由にもかかわらず山道を登り、納骨堂に案内してくれた。立派な堂の中には、びっしりと位牌が並んでいる。数百はあるだろうか。その背後には、75年間に亡くなられた方々の骨が安置されているという。しかし、黄さんは決して堂に近づこうとはしなかった。いったん入所

第二十二回

柳本彦彦

オアシスに生きる人びと

やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦（現代書館）」、「台湾革命（集英社新書）」など。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。

う。公学校（植民地下、台湾人が通った小学校）1年のときに発病が確認され、台南の家から連れてこられた。両親の付き添いも許されなかった。

「寂しかったでしょう」と問うと、「泣いた、泣いた」と言いながらも、「ここには子どもがいっぱいいいて、あのころが一番楽しかったなあ」と笑う。黄さんは、あの日以来62年の人生をここで送ってきた。故郷に帰ったことは一度

したら、多くの人たちは死んでもこの敷地から出ることはないのだから。

静かな日々を送ってきた黄さんの周辺が最近あわただしくなってきた。MRTの工事のために宿舎を迫われようとしているからだ。近くのアパートに移転先は保障されているが、生涯をこの地に埋める覚悟をしてきた黄さんの心は穏やかではない。さらに、最近、日本から弁護士が訪

れ、日本時代から入所している患者たちに訴訟を勧めるという出来事があった。彼らは、ハンセン病補償法に基づいて日本人と同様の補償を求めたのだが、厚生労働省から不支給の通知を受けたという。黄さんは、裁判のことはほとんど語らなかつたが、むしろ、それを契機に、いろいろな人が訪ねてくるようになったことに満足していた。

彼は、自室に私を招きいれると、開かない指に握らせた鉛筆でエレクトーンの鍵盤を叩いて、「もういくつ寝ると？」をうきうきと弾いてくれた。そのメロディをかき消すように、大きなダンブがうなり声をあげて通り過ぎていく。扉の中に閉ざされてきた楽生院に時代の波が押し寄せている。



ガジュマルの老木に覆われた病棟も撤去の運命を待つ